

令和6年度（2024年度）島根県立大学
地域政策学部 地域政策学科
地域づくりコース

総合型選抜（自己推薦）

小論文

【解答時間 90分】

以下の注意事項をよく読んで指示に従うようにしてください。

指示に従わない場合は、不正行為と見なしますので、注意してください。

1. 解答開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。許可なくこの問題冊子を開いた場合は、不正行為と見なします。
2. 解答時間は90分です。
3. 試験問題は、1ページから5ページです。解答開始の合図があった後、問題冊子を確認し、印刷不鮮明な箇所等があった場合は、直ちに申し出てください。
4. 解答用紙は2枚あり、問題冊子とは別になっています。解答は指定された解答用紙の解答欄に横書きで記入してください。
5. 受験番号、氏名は2枚の解答用紙の所定欄すべてに記入してください。
6. 問題冊子の余白を下書きに利用しても構いません。
7. 試験時間中の退出はできません。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

第1問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

地域づくりに必要な外部の人たちを「ヨソモノ・ワカモノ・バカモノ」と言ったりします。この三つを言い換えると、「外部・未来・ふまじめ」と言い換えることができるでしょう。確かに、被災した土地をどうするかを決めるのはそこに暮らす人たちですが、その決断は、「いまこの私」と「外部・未来・ふまじめ」を何度も往復した末に下されるべきだと思いません。なぜなら、ぼくたちの地域は、「いまこの私」だけのものではないからです。地域とは、そこで暮らしてきたご先祖たち、未来に住むかもしれない人たち、偶然に移り住むかもしれない人たちや、未来の子どもたち、本当は関心を持っていたのに言葉を発するのをためらっていた人たち、そして、膨大な数の死者たち。そのような人たちのものでもあるからです。決めるのは当事者かもしれないけれど、外の目線も忘れてはいけません。ぼくはそういう思いを持って活動を続けてきました。

ただ、未来ばかり、外のことばかり考えていればいいというわけでもありません。震災後¹は、特に「未来へのメッセージ」ばかりが目指されてきたようにも思います。けれど、すでに「いま」が、過去の人たちにとって未来であるはずです。ぼくたちは、過去に生きてきた人たちが描いた未来をつくることはできたのでしょうか。過去の人たちの「未来はこうなってほしいな」という思いを実現できたのでしょうか。というか、過去の人たちがどのように生き、どのような言葉を残したのかを知ろうとしてきたのでしょうか。未来を考えることはとても大事ですが、ぼくたちはあまりにも「過去」や「歴史」を軽視してはこなかったか、とも思うのです。「外部・未来・ふまじめ」だけでなく、過去に生きた人たち、つまり「死者」の存在を忘れることはできません。

震災後、ぼくは歴史に関心を持つようになりました。過去の災害や震災の記録、昔の人たちの暮らしぶりなども考慮しなければ、ぼくたちがいま何をすべきかも見えてこない気がするからです。その地域の文化は歴史が作り出したものです。なぜそこにそんな食べ物があり、なぜそのような風習があるのか。すべては歴史を読み解かないとわからない。気候や風土、その風土が生み出す食、地形や景観の美しさ、土地に息づく信仰や祭。市民性・県民性もあるでしょう。それらはみな、何百年という（地形でいえば何億年の）歴史が培ってきたものであり、それらを紐解き、価値を最大化しようとすれば、あるいは課題を解決しようとすれば、地域をフィールドにする人たちは歴史を軽視できません。

歴史は面白い。歴史は過去のもので、直接は触れることができません。つまり、歴史を紐解こうという人はすべてが「ヨソモノ」なんです。常にヨソモノ目線が働き、へえ、そうだったのか、そんな理由があったのかと面白い目線が生まれます。そして、そういう歴史との出会いを通じて、過去に生きた人たち、ぼくたちの先祖の思いを知ることにつながる。つまり、地域づくりとは、先祖の思い、死者の思いを知ることであり、彼らと対話することでもあるのだと思います。

過去を調べることがいまに通ずる。たとえば、自治体の成り立ち、江戸時代の藩の体制が

いまに引き継がれていることもあるし、明治維新が強く影響していることもあります。なんでこんな習慣が残ってるんだろう、なんでこの地区とこの地区は仲が悪いんだろう、みたいなことが、歴史を紐解くことで見えてくることがあります。思わず「おかしいな」と感じることも、いつの間にか対象と距離をとって「なぜそうなったのだろう」と面白いスイッチが入れられるようになると、歴史は途端に面白くなる。一見すると「えっ？」と驚いてしまうことに、長年にわたる地域間のこじれや、何百年前のあれこれが影響していることがわかってきます。

たとえば、福島県の会津地方のベテランたちが「先の戦争」といえば、それは第二次世界大戦ではなく「^{ぼしん}戊辰戦争」だったりします。ぼくの暮らす小名浜の隣町、泉町には寺院がほとんどなく、住民のお葬式が神式なのは、^{ぼしん}戊辰戦争後に「^{ほいぶつましやく}廃仏毀釈」があったからだし、小名浜は製造業のまちでやたらにパチンコ店が多いのは、炭鉱業が衰退したときに国が工業化を推進したからであり、工業の地であるためパチンコ店の用地取得が比較的簡単であるからであり、工場勤務は三交代制で労働者の休みの日の娯楽が少ないことに理由があったりするわけです。そんなふうに、その町の暮らしや風景は、いきなりその形になったわけではなく、何百年という歴史の積み重ねの先にできている。伝統工芸があるのも、基幹産業があるのも、原発があるのも、特別な習慣や風習があるのも、まちの「文化」や「歴史」の表れなんです。

劇作家の平田オリザさんは、著書『下り坂をそろそろと下る』（講談社現代新書、2016年）のなかで、地方が資本を収奪されないためには「文化の自己決定能力」を高めなければいけないと書いています。日本はもはや工業国ではなく、緩やかな衰退の途上にある。そんな時代に地域に人を呼び戻すには文化の力を^ま措いてほかにないとオリザさんはいいます。しかし、オリザさんは、その政策は「中央に決めてもらうのではなく、地元をよく知る自分たちが決めなければならない」とも語っています。

文化の自己決定能力。それは、自分の地域は、これこれこういう歴史や文化を持っている。こういうビジョンを持っている。だからこういうまちにするんだ、こういう政策を推進するんだ、ということを自分たちで決めるということ。しかしそのような自己決定能力は、先ほども言ったように外部からの目線も必要です。中の人だけで決められるものではなく、外の目線も考慮することが、地域全体の再発見につながるのだと思います。最後は自分たちで決めるけれど、対象から距離を置いて、過去や未来を往復したり、海外の事例を参考にしたり、回り道をして、いろいろなことを面白いなかで、自分のまちが見つかるのではないのでしょうか。

当事者は最短距離で解決を図らなければいけない。でも、共事者はちょっと違う。自分の関心のあることや好きなこと、ふまじめな欲求に従って回り道することができます。なぜこんなものが生まれたのだろう。なぜこんな風習があるのだろう。そうふまじめに思考をめぐらせるうちに、知る楽しさ、調べる面白さに接続されてしまったりする。そしてその思考の過程を社会にはみ出させ、漏れ出させていけばいい。地域の過去も未来もひとつ飛びして楽

しむ先に、あなただけの、その地域ならではの暮らしが形作られるのだと思いますし、それをぶつけ合う過程で文化の自己決定能力も磨かれていくのだと思います。

(出典：小松理虔『地方を生きる』ちくまプリマー新書、筑摩書房、2021年1月、183—188頁、なお、出題にあたりリード文を省略し、適宜注を付けた。)

注¹ 「震災」は「東日本大震災」のこと。

問1 下線部「外部・未来・ふまじめ」だけでなく、過去に生きた人たち、つまり「死者」の存在を忘れることはできません」とあるが、なぜか。本文の内容を踏まえて100字以内で書きなさい。

問2 あなたが「ヨソモノ・ワカモノ・バカモノ」の1人だとして、今後の地域づくりにどのようにかかわっていくことが望まれるか。本文の内容を踏まえて、600字以内で書きなさい。

第2問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

自然環境とは何か

自然環境は、経済理論のなかでどのように位置づけたらよいであろうか。自然環境は具体的には、森林、草原、河川、湖沼、海岸、海洋、水、地下水、土壌、さらには大気などを指す。また、森林、草原などに生存するさまざまな動・植物もすべて自然環境の一部である。

自然環境を構成する具体的な構成要素はこのような形に分類されるが、自然環境というとき、これらの構成要素のいくつかが相互に密接に関連した、一つの全体としてとらえる。たとえば、一つの森林をとったとき、たんに森林を構成する樹木だけでなく、伏流水として流れる水、さまざまな微生物をもつ土壌、そこに生存する動・植物などを統合して、一つの総体としての森林を自然環境、あるいはたんに環境という概念としてとらえているわけである。

自然環境は、経済理論でいうストックの次元をもつ概念である。自然環境を構成するさまざまな希少資源の多くはまた、生産、消費などさまざまな経済活動にさいして、不可欠な役割を果たす。このような意味で、自然環境が果たす経済的役割に焦点を当てるとするとき、自然資本という表現を用いることがある。

自然環境について、もっとも特徴的な性質は、その再生産のプロセスが、生物学的ないしはエコロジカルな要因によって規定されていることである。一つの森林を自然資本としてとらえて、たとえば、樹木の総重量によってそのストックをはかることにしよう。森林のストックが時間的経過にともなってどのように変化するのであろうか。森林を構成する個々の樹木がどのようなペースで成長し、あるいは枯れてゆくかによってはかれる。それは、個々の樹木の種類、年齢に依存するとともに、森林のなかに存在する水の流れ、土壌の性質、さまざまな動・植物、微生物の活動によっても影響される。

同じような現象は、他の自然環境についてもみられる。よく引用されるのは漁場である。経済学では、ある一つの、明確に境界を付けられた漁場を自然環境としてとらえて、そのストックの量を漁場に存在する魚の数ではかる。単純化のために、魚は一種類として、年齢構成は問わないことにする。この漁場における魚の再生産のプロセスは、魚の餌となるプランクトン、小魚などがどれだけ存在するかに依存するだけでなく、水温、海水の流れ、沿岸のエコロジカルな諸条件、場合によっては上流の森林の状態によっても左右される。

このようにして、A 自然資本のストックの時間的経過にともなう変化は、生物学的、エコロジカル、気象的な諸条件によって影響され、きわめて複雑な様相を呈する。したがって、自然資本の時間的変化率は、経済理論がもっぱら対象にしてきた、工業部門における「資本」の減耗あるいは資本とは本質的に異なる性質をもつ。(後略)

(出典：宇沢弘文『社会的共通資本』岩波新書、岩波書店、2000年11月、204—206頁)

問 1 下線 A より、なぜ自然資本の時間経過にともなうストックの変化は極めて複雑な様相を呈するのか、200 字程度で説明しなさい。